

＜シンポジウム 6＞神経学における倫理

座長の言葉

座長 大阪大学医学系研究科神経内科 佐古田三郎
新潟大学脳研究所神経内科 西澤 正豊

(臨床神経, 48 : 951, 2008)

今回は神経学会ではじめて倫理に関する話題を取り上げた。神経学も医学の中の一つであり、ヒトを対象とする学である。神経学の倫理を扱う時は、他の医学と同様にヒトとは何かと問うところから開始しなければならない。故澤瀉久敬博士は人間の特性を6つ挙げている。「物質である、生物である、意識をもっている、社会生活をしている、人格をもっている、死ぬことを自覚している」。医学が医療技術という形で発展してきた近代社会においては、「ヒト」は忘れ去られ、「長い生」が議論の対象となることが多い。そのような考えると、澤瀉先生のヒトの定義は長らく医学部で多くのことを観てきた哲学者としての思想を感じる。ヒトについて考えた後、私達が思いを巡

らせなければならないのは「健康」についてである。健康についてはWHOも記載しているが、元来定義できるものではない。生きることの信条があってこそ決定できるものであり、ヒトによってことなる。ヒトそして健康について深く考えていなければ、倫理について語ることはできない。

本倫理シンポジウムはそれぞれの演者が自己の信条に基づいて、ことなった神経学領域の倫理について語られる。多様な立場の方が語られる講演により、それを聴講される方々の心の中に「定義できない神経学の倫理」が浮かび上がればと願っている。